「透明な批評」で読むアガサ・クリスティ

――ミス・マープルの履歴書（2）人物相関図

坂　田　薫　子

序――「透明な批評」とは何か

文学批評理論に関する入門書である廣野由美子の『批評理論入門』（2005年）の第2部第13章にも分かりやすく解説されているが、「透明な批評（transparent criticism）」を簡単にまとめると、次のようになる。アントニー・デイヴィッド・ナトール（Anthony David Nuttall）はウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare）についての研究書『ニュー・ミメーシス』（*A New Mimesis*、1983年）で批評の種類を「不透明な（Opaque）」（ナトール　80頁）批評と「透明な（Transparent）」（ナトール　80頁）批評に分類する。前者はテクストを客体としてとらえ、テクストの外側に立って分析する方法であり、後者はテクストの内側に入り込み、あたかも作品内の虚構の出来事や登場人物が現実のものであるかのように論じる方法である（ナトール　80～81頁）。ナトールは『ハムレット』（*Hamlet*、1601年ごろ）、『リア王』（*King Lear*、1606年）、『マクベス』（*Macbeth*、1606年）、そしてヘンリー・ジェイムズ（Henry James）の『ある婦人の肖像』（*The Portrait of a Lady*、1881年）などを例に両者の違いを解説し、そして廣野は「透明な批評」を用いて、『フランケンシュタイン』（*Frankenstein*、1818年）の「アーネスト・フランケンシュタインはどこへ行ったのか？」の答えを探る。

そこで、論文「「透明な批評」で読むアガサ・クリスティ――ミス・マー

Studies in English and American Literature, No. 58, March 2023
©2023 by the Engish Literary Society of Japan Women's University

プルの履歴書」では、素人探偵ミス・マープル（Jane Marple）が活躍するアガサ・クリスティ（Agatha Christie）のミステリー小説を対象に、「不透明な批評」を用いて作家クリスティのミステリーの手法を分析するのではなく、「透明な批評」を用いてミス・マープルをあたかも実在の人物として扱い、彼女の身辺調査を行っている。前回、論文「(1) 年齢」では、ミス・マープルが一体何歳なのかを解読してみたので、本論文「(2) 人物相関図」では、彼女には何人甥や姪がいるのかなどといった彼女の身元調査を試みる。なお、クリスティ作品はイギリスとアメリカでの出版の時期が異なることが多いが、原則としてイギリスでの出版年を示し、アメリカでの出版の方が早い場合のみ両方の年を示すこととする。

1.　現住所、セント・メアリ・ミード村ハイ・ストリート

セント・メアリ・ミード村（St. Mary Mead）という場所を「透明な批評」を用いて現実のイングランドの土地であるかのように分析し、田園のイングリッシュネスの変遷についての論じるのは別の機会に譲り、本論文ではミス・マープルとセント・メアリ・ミード村の関係を考察してみたい。まず、ミス・マープルはセント・メアリ・ミード村の出身ではないことを確認しておこう。

初期作品である短編集『13 の謎』（*The Thirteen Problems*、1932 年）や最初の長編『牧師館の殺人』（*The Murder at the Vicarage*、1930 年）を読むと、確かにミス・マープルはセント・メアリ・ミード村で生まれ育ち、近隣の町はともかく、都会に出かけたことがない人物であるかのような印象を与える会話が数多く見られる。例えば、『13 の謎』に収められている「聖ペテロの指のあと」（“The Thumb Mark of St. Peter”、1928 年）では、ミス・マープル自身が「私が生まれてからずっとこの〔セント・メアリ・ミード村という〕辺鄙な場所に住んでいるので、面白い経験をしたことがないと思っているのでしょうね」（83 頁）と述べている[1]。また、「青いゼラニウム」（“The Blue Geranium”、1929 年）でバントリー夫人（Dolly Bantry）は

ミス・マープルは「セント・メアリ・ミード村をほとんど出たことがない」（101 頁）と述べ、「四人の容疑者」（“The Four Suspects”、1930 年）ではミス・マープル自身が「私はほとんどセント・メアリ・ミード村を出ることがありません」（161 頁）と述べている。さらには、『牧師館の殺人』でセント・メアリ・ミード村が所属する州の警察本部長メルチェット大佐（Colonel Melchett）も（よく知りもしないで勝手な推測をしているだけであったとしても）ミス・マープルは「生涯この村をほとんど出たことがない」（85 頁）と述べていることなどを鑑みると、当初クリスティは、ミス・マープルはイングランドの極々小さな村に生まれ育ち、外の世界を知らない老嬢であるという印象を読者に与えたかったのかもしれない。

しかし、次のセクション「2.1.」で詳しく論じるように、彼女の父親は大聖堂（cathedral）の大司祭（dean）か参事司祭（canon）であった可能性が高く、その場合、彼の牧師館が小さなセント・メアリ・ミード村にあったことは有り得ないばかりか、ミス・マープルは少女時代にイタリアの寄宿学校に通ったり、親族とヨーロッパを旅行したりと、作品が進むにつれて、「辺鄙な田舎で一生を過ごした」わけではないことが明らかになっていく。また、『魔術の殺人』（*They Do It with Mirrors*、1952 年）によると、ミス・マープルはイタリアの寄宿学校で出会ったアメリカ人姉妹の姉の方が 1 年か 2 年に一度ヨーロッパを訪問するたびに、ロンドンの高級ホテルで親睦を深めていることが記されているので、たびたび都会の喧騒を垣間見る生活をしていることもうかがえる。

そして、これは彼女の口癖のひとつでもあるのだが、ミス・マープルは機会があるたびに、人を的確に判断する自分の能力（探偵としての勘）はセント・メアリ・ミード村で磨かれたと言っているものの、短編集『13 の謎』においてバントリー大佐（Colonel Arthur Bantry）夫妻の屋敷で披露する「クリスマスの悲劇」（“A Christmas Tragedy”、1930 年）の物語は「ずっと昔に起こった」（165 頁）事件に関するものであり、ミス・マープルがもう「ずっと昔」から殺人（をこれから犯す可能性のある）者を初見で見抜く

能力を持っていたことが明らかになる。我々読者は作品群を読み進めるにしたがって、ミス・マープルがセント・メアリ・ミード村の出身である可能性は低く、幼少期から広く世界を見てきており、彼女の推理力は必ずしもセント・メアリ・ミード村での経験（のみ）が生み出したものではないという確信を深めていくことになるのである。

2.　家族と親族

では、セント・メアリ・ミード村におけるミス・マープルの住居と彼女と近隣の人びととの関係を論じる前に、彼女の家族・親族について分析しておこう。

2. 1.　親族は宗教関係者ばかり？――おじと父親

父親の職業を推測するにあたって、まず、おじについての情報を拾い出してみよう。ミス・マープル作品には彼女の（少なくとも）3 人のおじの話が登場する。1 人目が『バートラム・ホテルにて』（*At Bertram's Hotel*、1965 年）で語られるイーリー（架空の設定でなければ、ケンブリッジシャーの都市）の参事司祭（Canon of Ely）であったトマスおじさん（Uncle Thomas）である。ミス・マープルは 14 歳のとき、このトマスおじさん夫妻とバートラム・ホテルに滞在した思い出が忘れられず、甥のレイモンド（Raymond West）とその妻ジョアン（Joan）の厚意に甘えて、バートラム・ホテルに滞在させてもらう[2]。もう 1 人のおじが『鏡は横にひび割れて』（*The Mirror Crack'd from Side to Side*、1962 年）で語られるチチェスター（架空の設定でなければ、ウエスト・サセックスの都市）の大聖堂の参事司祭（a Canon of Chichester Cathedral）をつとめていた人物である。彼の名前は明らかにされていないが、ミス・マープルはチチェスター大聖堂の境内（Close）に住んでいた彼の家によく滞在したことを思い出している。別のもう 1 人のおじが短編集『ミス・マープルの最後の事件簿』（*Miss Marple's Final Cases*、1979 年）に収められている「奇妙な冗談」（“Strange Jest”、アメリカ版 1941

年、イギリス版 1944 年）と「昔ながらの殺人事件」（“Tape-Measure Murder”、アメリカ版 1941 年、イギリス版 1942 年）で言及される、生涯独身だったヘンリーおじさん（Uncle Henry）である。ただし、「奇妙な冗談」のヘンリーおじさんは陽気でいたずら好きで、甥や姪を困らせていたが、「昔ながらの殺人事件」のヘンリーおじさんは自制心に富み、草花を愛でる人であったというので、2 人は別人で、ヘンリーという名前のおじが 2 人いたのかもしれない。

これらのことを踏まえたうえで、ミス・マープルが『魔術の殺人』で自分のことを、「ある大聖堂境内〔あるいは、「よくある『カテドラル・クローズ（大聖堂境内）』という名前の住所のひとつ」〕からやって来たピンク色の頬をしたイギリスの少女」（3 頁）と述べている箇所から彼女の出自を推察してみると、おそらく彼女の父親もおじたちと同じように、イギリスのどこかの都市の大聖堂の大司祭か参事司祭だった可能性が高く、マープル家はどこかの都市の大聖堂の境内にその住まいがあったのだろう。『魔術の殺人』でミス・マープルが自分の母親がよくゼリーとブロスを作って病人に持って行ったことを回想しているのも、マープル夫人が（ヴィクトリア朝時代の）牧師の妻だと考えると説得力がある。

もしもミス・マープルの父親が大司祭や参事司祭ではなかったとしても、マープル家が「カテドラル・クローズ」に住んでいたこと、そしてミス・マープル自身が参事司祭をつとめていたおじのもとを訪ねたり、一緒に旅行をしたりしていたことは、ミス・マープルの育った環境がかなり宗教的だったことをうかがわせる。彼女は『バートラム・ホテルにて』で、かつてハンプシャーにある牧師館で、のちにウエストチェスター（Westchester）という架空の都市の英国国教会主教（Bishop of Westchester）になった「可愛いロビー（dear Robbie）」（21 頁）の遊び相手になったことを思い出したりもしている。『カリブ海の秘密』（*A Caribbean Mystery*、1964 年）に「ミス・マープルは自分の周りの〔イギリス南部の〕牧師たちのことについてなら、かなりよく知っていた」（168 頁）という描写があるのはそのためだろ

う。同作品では床に就く前にお祈りをしているミス・マープルの様子が描写されているし、『バートラム・ホテルにて』には彼女がいつも信仰書を持ち歩いていることが記され、『復讐の女神』（*Nemesis*、1971 年）でも彼女は旅行先で信仰書を読んでいる[3]。

2. 2.　母親、祖母、おば、大おじ、大おば、そしていとこ

『バートラム・ホテルにて』によると、ミス・マープルの母親の名前はクリスティの母親と同じクララ（Clara）で、ミス・マープルは子どものころ、母親と祖母とともにパリに出かけている[4]。ミス・マープルにはおじだけでなく、おばも何人かいる。『バートラム・ホテルにて』ではロンドンの百貨店アーミー・アンド・ネイヴィー・ストア（The Army & Navy Stores）を再訪し、この百貨店の常連客だったヘレンおばさん（Aunt Helen）との思い出を懐かしむ。この百貨店は 1872 年に開店し、1920 年代までに広く一般客にも開放されるまでは、会員を軍人とその家族及び紹介者のみに限定しており、ミス・マープルにとっても「アーミー・アンド・ネイヴィー・ストアは軍人とその妻、娘、おば、祖母を連想させた」（69 頁）とあることから、おそらくヘレンおばさんの夫（ミス・マープルにとってのおじ）は軍人だったのではないかと推測される。あるいは、もしもヘレンおばさんがミス・マープルが 14 歳のときに一緒にバートラム・ホテルに滞在したトマスおじさんの妻であるのならば、ヘレンおばさんの父親が軍人だったのかもしれない。『復讐の女神』には他のおばたちの話が出てくる。第 7 章では 5 回も難破を経験したことがあるというおばの話が披露され、第 12 章には嘘をついている人を見破る能力のあった、別のおばの話も出てくる。これら 2 人のおばの名前は明らかにされていないが、嘘を見破る能力のあったおばの夫（ミス・マープルから見るとおじ）の名前はジャック（Jack）である。

父母のおじとおば（ミス・マープルにとっての大おじと大おば）の話も登場する。『牧師館の殺人』でミス・マープルは、年配者への敬意が足りない

若い世代に向かって、ミス・マープルが 16 歳のとき、ファニー大おばさん（Great Aunt Fanny）は「若者は年寄りを愚かだと思っているけれど、年寄りは若者が愚かだということを知っているのよ！」（292 頁、強調は原典によるもの）とよく言っていたという話をする。また、トマス大おじさん（Great-Uncle Thomas）はすでに引退した提督で、『バートラム・ホテルにて』によると、かつてリッチモンドに住んでいたそうである。ミス・マープルは『復讐の女神』で「海軍関係の友人が何人もいる」（70 頁）と述べているが、これは、例えば『予告殺人』（*A Murder Is Announced*、1950 年）で言及されているように、セント・メアリ・ミード村に何人もの退役軍人が住んでいるため、そうした人びととの交流を意味しているということも考えられるが、他方で、上述のように、ヘレンおばさんの夫か父親が軍人であったり、トマス大おじさんが提督であったりと、ミス・マープルの親族には宗教関係者のみでなく、軍関係者も多かったのかもしれない[5]。

いとこの話も出てくる。「昔ながらの殺人事件」では、いとこのアントニー（Antony）とゴードン（Gordon）について触れられ、『動く指』（*The Moving Finger*、アメリカ版 1942 年、イギリス版 1943 年）では、姪の義理の姉（か妹）が匿名の手紙をもらった経験のある女のいとこの話が紹介され、『バートラム・ホテルにて』では、吃音のあったいとこのファニー・ゴッドフリー（Fanny Godfrey）の話が紹介される。同じく『バートラム・ホテルにて』では、のちにレディ・メリデュー（Lady Merridew）となった遠縁のいとこエセル（Ethel）の話が登場する。この後、甥と姪についても考察するが、それぞれの物語の語りの現在においてはすでに他界しているとしても、ミス・マープルには実に数多くの親族との交流の経験がある（あった）ことがうかがえる。

2. 3.　姉妹と甥と姪

ミス・マープルに兄や弟がいる様子はないが、姉か妹が何人か（少なくとも 2 人は）いる。初めて姉妹の存在について触れられるのは、初期の短

編集『13の謎』に収められている「四人の容疑者」である。ここでミス・マープルは「姉（妹）と私にはドイツ人の家庭教師がいました」（161頁）と述べている。ミス・マープルの姉妹の1人は「聖ペテロの指のあと」に登場する姪メイベル・デンマン（Mabel Denman、旧姓不明）の母親で、もう1人は甥レイモンドの母親である。レイモンドの母親はウエスト氏と結婚し、おそらくウエスト夫妻がレイモンドが幼いうちに亡くなったために、ミス・マープルが彼の母親代わりをつとめてきたのであろう。ミス・マープルは、セント・メアリ・ミード村を訪ねて来るレイモンドが退屈しないようにと、グリゼルダ・クレメント（Griselda Clement）が『牧師館の殺人』で「甥っ子を楽しませる一行（the Nephew Amusing Party）」（254頁）と呼ぶ人員を集めることを怠らない。こうした集まりが短編集『13の謎』での「火曜クラブ」に発展したわけである。そうしたミス・マープルの愛情に感謝しているレイモンドの方も、彼の発言は時として少々上から目線ではあるものの、ミス・マープルのことを母親のように慕い、世話をし続けているように思われる。セント・メアリ・ミード村は「よどんだ水たまり」（『牧師館の殺人』 196頁）であるとか、「完全に発展の遅れた地域」（『鏡は横にひび割れて』 28頁）であると散々悪口を言いながら、レイモンドが（特に独身時代に[6]）わざわざセント・メアリ・ミード村に足繁く通っているのは、おばの様子を気にかけているからであろう。

クリスティは『自伝』（*An Autobiography*、1977年）でレイモンドはミス・マープルに「どんなことでも許してしまうような思いやり」（436頁）を持って接していると述べているし、『牧師館の殺人』の語り手クレメント牧師（Leonard Clement）もレイモンドはミス・マープルに「どんなことでも許してしまうような愛情」（195頁）を抱いているように見えると言っている。『予告殺人』ではリューマチに悩んでいるミス・マープルのために国内旅行をプレゼントし、『パディントン発4時50分』（*4.50 from Paddington*、1957年）では肺炎にかかったミス・マープルのために高給取りのスーパー家政婦ルーシー・アイレスバロウ（Lucy Eyelesbarrow）を雇ったエピソード

が紹介され、『鏡は横にひび割れて』では高齢のためと、気管支炎にかかり、体力が低下したため、かかりつけ医のヘイドック医師（Dr. Haydock）から住み込みの世話人を付けることを命じられると、すぐに住み込みの付き添い看護婦（nurse attendant）ミス・ナイト（Miss Knight）を手配し、1960年代は西インド諸島のリゾート地への旅行をプレゼントしたり、ロンドンの高級ホテルに数週間逗留させてあげたりと、レイモンドはミス・マープルに気を配ることを怠らない。

メイベルとレイモンドが姉弟ではなく、それぞれの母親がミス・マープルの姉妹であると考えられる理由は、ミス・マープルが「聖ペテロの指のあと」で姪のメイベルが巻き込まれた事件について話しているとき、甥のレイモンドがまったくその事件を知らなかっただけではなく、メイベルの存在さえ知らなかった様子がうかがえる点である。メイベルは22歳で結婚し、その10年後、つまり彼女が32歳ごろに夫のデンマン氏が亡くなる。それが「聖ペテロの指のあと」が話されている語りの現在よりも10年から15年前だというので、「聖ペテロの指のあと」の物語が語られている時点では、メイベルは（生きていれば）40代後半となる。ただし、ミス・マープルはメイベルのことを話すときに、「メイベルは私の姪だった」（84頁、強調は執筆者によるもの）と過去形で話しているので、物語の現在では亡くなっているのかもしれない。もしもメイベルが事件後間もなく亡くなっているとしたら、「火曜クラブ」が開催されているころはまだ独身だが、作家としてはすでに名が売れ始めていたレイモンドは、20代後半から30代前半と思われるので、デンマン家の事件があったころはまだ幼く、彼にとって「従姉」にあたるメイベルの存在も彼女の夫が殺された事件のことも聞いたことがなかったのかもしれない。

また、短編集『ミス・マープルの最後の事件簿』に収められている「ミス・マープルの思い出話」（“Miss Marple Tells a Story”、1934年ラジオ放送、1935年出版）において、ミス・マープルは、「聖ペテロの指のあと」の話ですでにメイベルの存在を知っているレイモンドに向かって自分の姪の

話をする際に、彼女の口癖である「何某さんのことを覚えていますか？」という言い方を用いて、「メイベルのことを覚えていますか？」とは問わずに、「私の年若い姪の 1 人（“a young niece of mine”）」（99 頁）という説明の仕方をしていることから、ミス・マープルにはレイモンドの姉妹ではなく、メイベルでもない、別の姪がいることがうかがえる。こちらの姪はミス・マープルが短編集『13 の謎』の中に収められている「溺死」（“Death by Drowning”、1931 年）でサー・ヘンリー・クリザリング（Sir Henry Clithering）に向かって言及している姪と同じかもしれない。この「私の若い姪の 1 人」がメイベルの姉妹ではないのなら、ミス・マープルには、レイモンドの母親とメイベルの母親以外にも姉か妹がいたこと（その場合は最低でも 3 人の姉妹がいたこと）になる。ミス・マープルの姉妹の子どもたちの数は意外に多く、その年齢も多岐にわたっており、その結果、交流のないいとこ同士もいたために、レイモンドはメイベルや他のいとこたちのことを知らないのではないだろうか。

事実、シリーズ全体を見ると、ミス・マープルは何度も自分には何人もの甥と姪がいると説明している。例えば「ミス・マープルの思い出話」で、ミス・マープルはレイモンドのことを「甥っ子たちの中で一番親切な子（“the kindest of nephews”）」（97 頁）と言い（ただし、「世の中の甥の中で最も優しい甥」の意味かもしれない）、甥や姪について触れる際も、例えば『書斎の死体』（*The Body in the Library*、1942 年）では「私の年若い甥っ子たち」（158 頁）と複数形を使い、『予告殺人』でも「私の甥っ子たちと姪っ子たち」（141 頁）、「私には甥たちと姪たちがいます」（206 頁）と複数形を使っていることから、甥も姪も（少なくとも）それぞれ 2 人以上いることは明らかである。すると、レイモンドは独りっ子のように思われるので、レイモンドとメイベル以外の甥と姪がすべてメイベルの兄弟姉妹であるというのでない限り、ミス・マープルには、レイモンドの母親やメイベルの母親以外にも姉妹がいたことが推測される。

上述のようにメイベルは 22 歳で結婚し、その 10 年後に夫のデンマン氏

が亡くなる。それが「聖ペテロの指のあと」が話されている時点から10年から15年前だというので、物語の現在に彼女が生きていれば40代後半となる。すると、ミス・マープルの姉妹となるメイベルの母親もそのころ生きていたとしたら、おそらく65歳前後であろう。クリスティが『自伝』でミス・マープルはその初登場時、65歳から70歳の設定であったと言っているので（436頁）、メイベルの母親はミス・マープルの少し年下の妹だったのではないだろうか。他方で、これも上述のように、レイモンドは「火曜クラブ」が開催されていたころは独身で、しかし作家として名が売れ始めているので、20代後半から30代前半と思われるため、彼の母親が生きてれば、そのころおそらく50歳前後であろう。ミス・マープルは娘ばかりの家族の長女で、年長と年少の姉妹の年齢の開きは20歳近くあった可能性がありそうだ。

2. 4.　甥レイモンド・ウエストについて

では、もう少しレイモンドについての考察を続けてみよう。レイモンドはミス・マープルの姉か妹の子どもで、執筆活動を生業にしている。『カリブ海の秘密』によるとオクスフォード大学出身のようである。「火曜クラブ」が開催されている1930年ごろは芸術家（クリスティの『自伝』によると画家（436頁））のジョイス・レンプリエール（Joyce Lemprière）と付き合っていた。妻となったジョアンも芸術家（画家）である[7]。レイモンドは1950年代が舞台の「グリーンショウ氏の阿房宮」（“Greenshaw’s Folly”、1956年、現在は短編集『ミス・マープルの最後の事件簿』に収められている）に中年男性として登場し、ジョアンは1960年代が舞台の『バートラム・ホテルにて』でそろそろ50歳になろうとしている。ウエスト夫妻はライオネル（Lionel）とデイヴィッド（David）という息子たちに恵まれる。デイヴィッドは『パディントン発4時50分』で「次男」（25頁）として明記されている一方で、ライオネルが彼らの長男であるとは明記されてはいないものの、論文「(1) 年齢」で論じたように、「昔ながらの殺人事件」と

「奇妙な冗談」にミス・マープルの姪孫（「てっそん」、甥姪の息子）として紹介されるライオネルがウエスト家の長男と考えられる。ライオネルの趣味は「奇妙な冗談」によると切手集めで、デイヴィッドは『パディントン発 4 時 50 分』によるとイギリス国鉄で働き[8]、2 人はそれぞれの趣味を用いて、ミス・マープルの謎解きを時には間接的に、時には直接的に助けることになる。

短編集『13 の謎』に収められている「金塊事件」（“Ingots of Gold”、1928 年）での若きレイモンドはまだ自分の持ち家を持っていなかったが、結婚後、1940 年代初頭が舞台と思われる『スリーピング・マーダー』（*Sleeping Murder*、1976 年）ではロンドンのチェルシーに家を持ち、そこには少なくとも 2 人の召使いがいる。1950 年代が舞台となる「教会で死んだ男」（“Sanctuary”、1954 年、現在は短編集『ミス・マープルの最後の事件簿』に収められている）ではロンドンにスタジオ・フラット（仕事場兼住宅）を持ち、アメリカに旅行中、ミス・マープルにハウスシットを依頼する。そして「グリーンショウ氏の阿房宮」では田舎に別荘を持っている。ジョアンにはジャイルズ・リード（Giles Reed）という従弟とルイーザ・オックスリー（Louisa Oxley）という姪がおり、ジャイルズの妻グウェンダ（Gwenda Reed）は『スリーピング・マーダー』のヒロインとなり、ルイーザは「グリーンショウ氏の阿房宮」で活躍する。

ここで、ミス・マープルの経済状況について触れながら、レイモンド像を考察しておこう。ミス・マープルは『動く指』のミス・バートン（Emily Barton）のように戦争の影響で経済的に困窮し、持ち家を貸し出し、自分は間借りしなければならないような立場には追い込まれていないことから、万が一のときにはいつでも手を差し伸べる用意のある甥レイモンドの存在も心強いものの、国の経済状況が悪くても大きな影響を受けずに済む程度には充分な財産（からの配当）が確保されていることが分かる。だからと言って、ミス・マープルはそれほど裕福でもない。『ポケットにライ麦を』（*A Pocket Full of Rye*、1953 年）でミス・マープルは教会周辺に住む自分た

ちオールドミスについて「教会周辺のこぎれいな家に住む経済的に苦しい老嬢たち」(187 頁) と描写しているし、『復讐の女神』でラフェール氏 (Jason Rafiel) の遺言によりカントリーハウスとガーデンを巡る高額なツアーに参加した際にも、「自分のお金ではとても払えない」(130 頁) と述べている。『魔術の殺人』の冒頭でミス・マープルは、第二次世界大戦後の財政難の中、生活の心配をせずに済んでいるのは甥のレイモンドのおかげだと感謝の念を表明している。上述のように、彼女に西インド諸島のリゾート地やロンドンのバートラム・ホテルに逗留するなどといった贅沢な旅を繰り返しさせているのは甥のレイモンドのお金であって、彼女自身のお金ではない。ミス・マープルはレイモンドの才能を認めつつ、彼の著す小説には批判的だが、おばにこれだけの贅沢をさせることが可能なレイモンドは、短編集『13 の謎』の中の短編「火曜クラブ」(“The Tuesday Night Club”、1927 年) に初登場したころは新進気鋭の作家にすぎなかったが、『牧師館の殺人』ではクレメント牧師に「詩人としてかなりの名を成している」(195 頁) と描写されるまでに、そして『スリーピング・マーダー』では「人気があるとは言えないが、有名な小説家」(15 頁) になっている。そして、『予告殺人』ではミス・マープル曰く、「気の利いている本を書いてとても成功し」(97 頁)、稼いだお金でリューマチに悩む彼女にスパ施設のあるホテルに逗留させている。「グリーンショウ氏の阿房宮」ではまだ「文学界では知られた存在だが、いわゆるベストセラーではなかった」(155 頁) ものの、『鏡は横にひび割れて』ではヘイドック医師に「今日のベストセラー作家の 1 人」(253 頁) だと描写されるまでになっている。『カリブ海の秘密』でミス・マープルが語っているように、レイモンドは作品が進むにつれて、かなりの「多額の収入」(4 頁) を稼ぐ「売れっ子の作家」(4 頁) へと成長していったのだろう。

2. 5.　教育と介護

論文「(1) 年齢」で解き明かしたように、ヴィクトリア朝時代の 1860 年

代から 70 年代に生まれ、19 世紀末に青春時代を過ごしたミス・マープルにとってはさほど不自然な設定ではないのだが、短編集『ミス・マープルの最後の事件簿』に収められている「申し分のないメイド」（“The Case of the Perfect Maid”、1942 年）によると、彼女はいわゆる正式な学校教育は受けておらず、ガバネスに教育を受けている。『バートラム・ホテルにて』ではミス・レッドベリー（Miss Ledbury）という名前のガバネスの話が登場する。イギリス人以外のガバネスからも教育を受けていたようで、「四人の容疑者」ではドイツ人のガバネスに習った経験を披露している。また、彼女の教育はイギリス国内にとどまらず、『魔術の殺人』によると、10 代後半にはイタリアのフローレンスの寄宿学校にも通っている。そこでもドイツ人の先生、フローライン・シュヴァイヒ（Fraulein Schweich）に習っている。

『魔術の殺人』でミス・マープルは将来看護婦になるつもりでいたことが分かる。1930 年前後が語りの現在である短編集『13 の謎』の中の「クリスマスの悲劇」で語られる「ずいぶん昔」（165 頁）に起こった殺人事件に遭遇した際、一緒にいた別の女性は動揺のあまりただ呻くだけであったが、ミス・マープルはすぐにひざまずき、倒れている女性の脈を測っている。彼女は看護婦になるための何らかの教育や訓練を受けていたのであろう。また、『牧師館の殺人』には、メルチェット大佐からの間違い電話でホーズ牧師補（Mr. Hawes）の具合が悪いと知ると、夜の 11 時すぎであるにもかかわらず、何か自分にもできることがあるのではないかとホーズ牧師補の下宿先まで訪ねて行く場面がある。クレメント牧師やメルチェット大佐が不快に思ったように、そこには好奇心もあったかもしれないが、おそらく、看護や医療の心得があるために取った行動であろう。

ミス・マープルが実際に看護婦であったという記述は作品群全体を通して存在してないが、いくつかの作品から、ミス・マープルが病人の世話に慣れていたことが明らかになる。「青いゼラニウム」ではミス・マープル自身が「私には少しばかり介護の経験があるんです」（119 頁）と述べ、『カ

リブ海の秘密』では彼女の「介護の長い経験」(188 頁) について触れられている。さらには『復讐の女神』でミス・マープルは「私は病人に慣れているんです。私は若いころ、たくさん病人の世話をしてきましたから」(165 頁) と述べている。また、同じく『復讐の女神』には、自分の経験から、病院の医師や看護婦のもののとらえ方はよく分かっていると述べている箇所がある。病院務めの経験はなくても、自宅での、そして病院での介護の経験があることがうかがえる。

このことは、彼女には家族や親族の介護の経験、それも特に年老いた両親の介護の経験があることを示しているのかもしれない。上述のように、娘ばかりのマープル家においてミス・マープルは長女で、彼女が家に残って両親の介護を行い、独身のままの生涯を送ることになったのではないだろうか。ミス・マープルについて、『カリブ海の秘密』の冒頭に、「彼女は年配者が若者を経済的に支援するのが当然であったばかりではなく、中高年が年配者の世話をするのも当然であった、そういう時代に生まれ育っていた」(13 頁) という説明がわざわざ存在しているのも、彼女が高齢の両親や親族を介護してきたことを暗示しているように思われる。ちなみにミス・マープルはこれまでに職業人として働いた経験があるようには描かれていない。おそらく、上述のように、働かなくても生計を立てていくことが可能な程度の遺産を両親から受け継いだのだろう。彼女は決して裕福ではないが、絶やすことなく住み込みのメイドを雇うことができているので、困窮しているわけでもない。彼女が自らを「レディ」として律し、ヴィクトリア朝的なプライドを持って生きているのも、こうした理由によるところが大きいようだ。なお、オールドミスとしてのミス・マープルについては別の機会に論じる予定である。

2. 6.　恋愛

『カリブ海の秘密』によると、ミス・マープルが若いころにクロッケーの試合で出会った「ほとんど自由奔放と言っていい考え方」(160 頁、強調は

原典によるもの）の青年のことを、ミス・マープルに「ふさわしい」（160 頁）、「結婚相手として理想である」（160 頁）と父親も気に入り、その青年は何回か彼女の自宅を訪問して来たものの、結局、ミス・マープルはその青年を「ものすごく退屈な人」（160 頁）だと思い、別れたようである。また、『バートラム・ホテルにて』によると、ミス・マープルは若いころ、不適切な青年と恋に落ちるが、母親にとがめられ、諦めた経験がある。こうしたことから、ミス・マープルは若いころ、実はいわゆる「いい人」よりも少々「不良」の男性に惹かれるタイプであったのではないかと思われる。場合によっては、それが結婚に至らなかった理由のひとつなのかもしれない。

短編集『13 の謎』に収められている「アスタルテの祠（ほこら）」（“The Idol House of Astarte”、1928 年）では、少女時代に追いはぎ団の長の衣装をまとった男性と踊って、踊りにくくて仕方がなかった話をしたり、「グリーンショウ氏の阿房宮」では古くからの友人のイースタリー将軍（General Easterly）と観劇に行った話をしたり、ミス・マープルは未婚ではあるが、けっして晩熟でも、潔癖症でもなく、上述のように、両親の介護など、他の事情から結婚に縁がなかっただけであったように思われる。

2. 7.　友だち

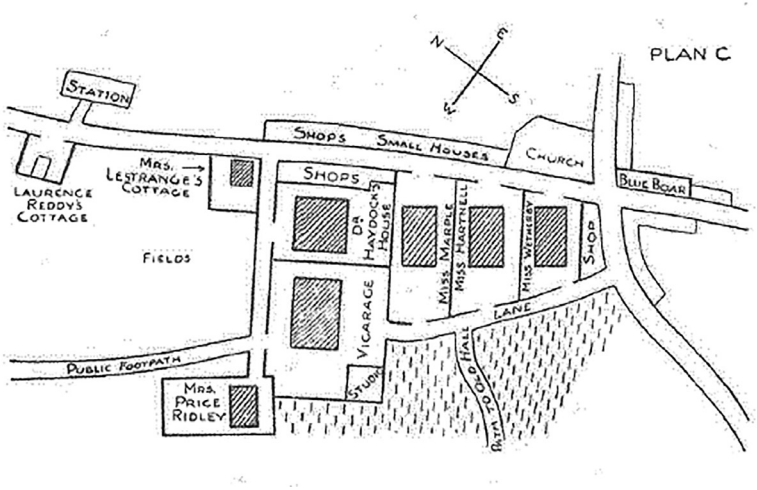
ミス・マープルには実に多くの友だちや知り合いがいる。『スリーピング・マーダー』には「彼女の数多くの友だちと親戚はイングランド中に散らばっていた」（135 頁）という描写があり、『復讐の女神』には「彼女には様々な外国出身の友だちが大勢いた」（83 頁）という説明がある。事実、『スリーピング・マーダー』ではロンドンのウエスト夫妻を訪問後、イングランド北部の友だちの家を訪問し、『魔術の殺人』では 1 年から 2 年に 1 回の頻度でアメリカからヨーロッパに旅行に来るアメリカ人の友人ルース・ヴァン・ライドック（Ruth Van Rydock）と親睦を深めていることは前述のとおりである。また、『パディントン発 4 時 50 分』ではスコットランドか

ら友人エルスペス・マギリカディ（Elspeth McGillicuddy）がセント・メアリ・ミード村を訪ねて来るし、『バートラム・ホテルにて』ではボストンに住む別のアメリカ人の友人エイミー・マカリスター（Amy McAllister）の話をしている。ミス・マープル自身が世界中を駆け巡ったり、多くの友人を自宅に招いてパーティーをしたりすることはないが、その交流の広さのおかげで、作品が出版されている年代特有の人種差別や階級差別からは免れていないものの、彼女の視野は広く、彼女には多様性を受け入れる度量がある設定になっているだろう。

3.　セント・メアリ・ミード村の仲間たち

ここまで、ミス・マープルの家族、親族について考察してきたので、ここからはまた彼女の住むセント・メアリ・ミード村について分析していこう。

3. 1.　ミス・マープルの住居



（図 1　『牧師館の殺人』のクリスティのイラスト「プラン C」（79 頁））

ミス・マープルの住まいデーンミード・コテッジ（Danemead Cottage、『ポケットにライ麦を』 247 頁）はいつごろからセント・メアリ・ミード村あるのだろうか。1930 年前後が舞台の『牧師館の殺人』でクレメント牧師は、彼の牧師館を含む、牧師館周辺の住宅群は同じ建築業者が一度に建てたので、玄関のベルの聞こえ方まで同じであると述べている。同じ建築業者が建設した住宅群であるということが示唆するのは、この一帯の住宅はある時期に行われた開発によって建てられた可能性が高いということである。そして 1960 年代が舞台の『鏡は横にひび割れて』の冒頭で、ミス・マープル、ミス・ハートネル（Miss Amanda Hartnell）、ミス・ウェザビー（Miss Caroline Wetherby）の家は一括りにされて、「クイーン・アン様式とジョージアン様式の家」（3 頁）と描写されている。クイーン・アン様式の方は 18 世紀初頭のアン女王朝時代ではなく、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのリバイバル時の様式を、ジョージアン様式の方は 18 世紀から 19 世紀にかけてのジョージ王朝時代ではなく、20 世紀初頭のリバイバル時の新ジョージアン様式を指していると思われる。さらに『鏡は横にひび割れて』の終盤で、ミス・マープルの敷地には「厩舎」（257 頁）（おそらく今は『パディントン発 4 時 50 分』のラザフォード・ホール（Rutherford Hall）の厩舎のように車庫として使われているのだろう）があることが明らかになるので、移動の手段として車ではなく、馬が用いられる方がまだ一般的であった時期に設計されたものであることも分かる。こうした情報をつなぎ合わせると、ミス・マープルの自宅周辺のセント・メアリ・ミード村の住宅群は、交通網の発展などで、都市部の周りに段々と郊外が広がっていった 19 世紀後期から 20 世紀初頭までの間に開発されたと考えることができるだろう。初期の『牧師館の殺人』では、映画館、病院、本屋に行くには隣町のマッチ・ベナム（Much Benham）に出かけて行かねばならず、『書斎の死体』などによると、州の警察本部はマッチ・ベナム町にあるので、セント・メアリ・ミード村はマッチ・ベナム町の郊外の位置を占めているのかもしれない[9]。

3. 2.　近隣の住居

では、こうした住宅群に住む人びとはいつからどういった経緯でセント・メアリ・ミード村に住んでいるのだろうか。バントリー大佐夫妻がゴシントン・ホール (Gossington Hall) に引っ越して来た経緯についてはセクション「3. 3. 6.」で述べることにして、ミス・マープルの「ご近所さん」たちについて考察してみよう。

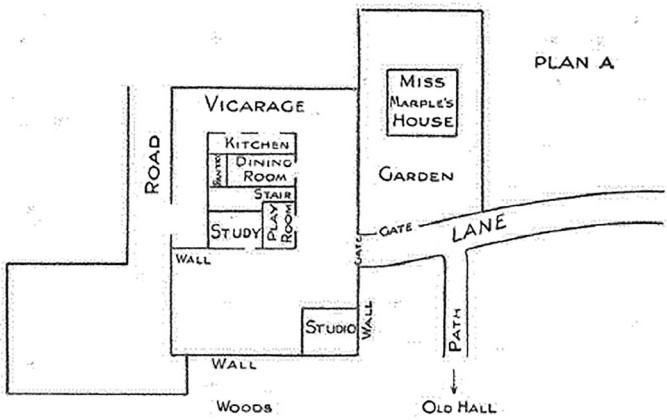
1948 年が舞台の『予告殺人』でミス・マープルは 15 年前 (つまり、1930 年代) のセント・メアリ・ミード村 (とその周辺) の様子を振り返り、ミス・マープルの近所にはハートネル家 (the Hartnells)、プライス＝リドリー家 (the Price Ridleys)、ウェザビー家 (the Weatherbys) がおり、彼 (女) らの前には彼 (女) らの父、母、祖父、祖母、あるいはおじ、おばが住んでいたと語っている。それならば、現在独り暮らしのオールドミスであるミス・ハートネルとミス・ウェザビーは、

(1) かつて、それぞれの家に家族 (両親) とともに住んでいて、両親が亡くなった後、その家で、独身のまま、独りで住み続けているのか、

(2) あるいは、家族 (両親) とともに別の場所で生活していたが、両親が亡くなったため、伯父 (叔父) か、やはり未婚であったのだろう伯母 (叔母) を頼ってセント・メアリ・ミード村に引っ越して来て、その伯父 (叔父) や伯母 (叔母) が亡くなったので、その後も当地に残っているのか、

のどちらかであることが分かる。また、未亡人のプライス＝リドリー夫人 (Mrs. Martha Price Ridley) はセント・メアリ・ミード村のプライス＝リドリー家に嫁いで来て、義理の両親や夫 (さらには息子) が亡くなった後も、(住み込みのメイドは考慮に入れずに言うと) 独りで当地に住み続けているのだろう。こうした情報は、ハートネル家、ウェザビー家、プライス＝リドリー家は、ミス・ハートネル、ミス・ウェザビー、プライス＝リドリー夫人が現在住んでいる住宅群が 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのある時点で開発され、売り出されたときにそれぞれの住居を購入し、その後、ミス・ハートネル、ミス・ウェザビー、プライス＝リドリー夫人は上記の

ような経緯を経て、そのままそこに暮らしているのであろうという推測を可能にしてくれる。



（図２『牧師館の殺人』のクリスティのイラスト「プランＡ」（26 頁））

ミス・マープルの場合は、介護を必要とする両親とともにデーンミード・コテッジに引っ越して来て、そこで彼らを看取ったのか、あるいは両親を亡くした後、彼らの遺した財産でデーンミード・コテッジを購入し、1 人で引っ越して来たのかは不明である。それでも敢えて推理してみると、次のように考えられないだろうか。上述のように、牧師館周辺の住宅群は同じ建築業者が建てたため、同じような構造であったとしても、クリスティが『牧師館の殺人』のために描いたイラストの「プランＣ」（79 頁）（図 1 参照）を見ると明らかなように、それぞれの建物の大きさは異なり、ミス・マープルの家は牧師館より小さく、当時レストレインジ夫人（Estelle Lestrange）が借りていたコテッジはミス・マープルの家より大分小さいことが分かる。そのため、ミス・マープルの家の部屋数は「プランＡ」（26 頁）（図２参照）に示されている牧師館の部屋数よりも少ないかもしれない。

（ただし、クリスティのイラストには省略があるようで、牧師館の 1 階の間取りを表した「プラン A」には、本来あるべき居間（drawing room）が描かれていない。）しかし、住み込みのメイドだけではなく、『鏡は横にひび割れて』によると、かつては庭師夫婦が台所の上の部屋に住んでいたというし、上述のように敷地内には厩舎もあるというので、1 人暮らし用に購入するには少々広い。以上のことから、ミス・マープルは当初は両親とともに引っ越して来たのではないだろうか。いずれにしても、ミス・マープルも他の家族と同じように、開発当初から当地に住んでいたように思われる。

3. 3.　セント・メアリ・ミードの住人

次に、セント・メアリ・ミード村とその周辺に住んでいる人びとを取り上げていこう。では、ミス・マープル宅に同居するメイドたちについて簡単に触れるところから始めよう。

3. 3. 1.　ミス・マープルのメイドたち

『鏡は横にひび割れて』での説明によると、ミス・マープルのメイドたちの多くは孤児で、ミス・マープルが孤児院から引き取り、メイドとして「育て上げ」（7 頁）、その後もっと報酬の良い勤め先へと移って行ったという。これは、第一次世界大戦後のイギリス女性に関する多くの研究書で論じられているように、戦後、女性たちは他の仕事に就くことが可能になってくると、住み込みの仕事をすることを嫌い、雇い主は貧困にあえぐ地域や、救貧院や孤児院などから家事労働者を募らねばならなかったという現実を映し出している[10]。ミス・マープルの例え話の中に出てくる住み込みのメイドたちは数多く、その性質も様々である。そこで彼女が巻き込まれる、あるいは自ら首を突っ込む事件や犯罪に深くかかわるメイドたちを数名だけ取り上げてみると、「教会で死んだ男」では、元メイドのグラディス（Gladys）が殺人事件の解決に一役買う。『ポケットにライ麦を』では、セ

ント・フェイス孤児院（St. Faith's Home、『鏡は横にひび割れて』では St. Faith's Orphanage）出身の（別の）グラディス（Gladys Martin）が殺人事件の被害者の1人となる。ミス・マープルが『鏡は横にひび割れて』で「パーラーメイドの近衛擲弾（てきだん）兵」（7頁）と呼ぶ最強の元メイド、「信頼に足るフローレンス（Faithful Florence）」（Florence Hill）が、『パディントン発4時50分』で現在下宿を経営している自宅にミス・マープルを泊め、事件解決に貢献する。

また、ミス・マープルのもとにはレイモンドによって住み込みの家政婦が送り込まれて来るときもある。セクション「2. 3.」で論じたように、『パディントン発4時50分』では、肺炎にかかったミス・マープルのためにレイモンドが高給取りのスーパー家政婦ルーシー・アイレスバロウを雇ったエピソードが紹介され、『鏡は横にひび割れて』では高齢のためと、気管支炎にかかり、体力が低下したため、かかりつけ医のヘイドック医師から住み込みの世話人を付けることを命じられると、レイモンドはすぐに住み込みの付き添い看護婦ミス・ナイトを手配する。ミス・ナイトが自分を赤ん坊のように扱うため、ストレスをため込んでいたミス・マープルは、近くにできた新興住宅地（Development）の半戸建住宅（a semi-detached house）に住み、小遣い稼ぎに通いでお手伝いに来ていた新人類の若き既婚女性、チェリー・ベイカー（Cherry Baker）の提案を受け入れ、チェリーが夫とともにミス・マープルの家をシェアする（以前、庭師夫妻が住んでいた、台所の上の部屋に住み、厩舎の上の部屋を趣味用の部屋にする）ことになる。

3. 3. 2.　ゴシップ仲間

次は、すでに何度も触れているゴシップ好きの年配女性たちについて考察しよう。ミス・マープルとオールドミスのトリオを成すのはハイ・ストリートに向かってミス・マープルの右隣に住むミス・ハートネルと、そのまた右隣に住むミス・ウェザビーである[11]。ミス・ハートネルは1935年前

後が舞台と考えられる「昔ながらの殺人事件」で 55 歳と明記されているので、『牧師館の殺人』に初登場時は 50 歳前後となり、ミス・マープルより 10 歳から 15 歳ほど年下のようである。オールドミスのトリオの中で最年少なのだろう。ミス・ウェザビーは 1960 年代が舞台の『鏡は横にひび割れて』ですでに亡くなっており、彼女が住んでいた家には銀行の支店長の家族が住んでいることが記されている。

ミス・ハートネルとミス・ウェザビーとともにミス・マープルのゴシップ仲間であるプライス＝リドリー夫人は『牧師館の殺人』での初登場時、すでに夫と息子を亡くしている。オールドミスのトリオが皆、「年寄りの (old)」で形容されるのに対して、プライス＝リドリー夫人は「中年の (middle-aged)」(119 頁) と描写されている。上述のように、50 歳前後と思われるミス・ハートネルが「初老の (elderly)」(141 頁) と描写されているので、プライス＝リドリー夫人は 40 代ではないかと思われる。彼女はその後『書斎の死体』と「申し分のないメイド」に登場するが、以後は作品に登場したり、言及されたりすることがなくなる。

3. 3. 3.　牧師

ミス・マープルの左隣にはヘイドック医師の家と牧師館がある。ミス・マープルが最初に登場する短編「火曜クラブ」よりも前の牧師は、『予告殺人』と「教会で死んだ男」に登場し、彼女が名付け親となったバンチ (Bunch) (ダイアナ・ハーモン (Diana Harmon)) の父親である。作品に本人が登場する最初の牧師は、短編集『13 の謎』に登場する老齢のペンダー牧師 (Dr. Pender) で、彼のあとを引き継ぐのが『牧師館の殺人』に登場するクレメント牧師である。彼は登場時 45 歳前後で、20 歳ほど年下のグリゼルダと結婚したばかりで、その後、長男デイヴィッド (David) と次男レナード (Leonard) に恵まれる。『牧師館の殺人』では当時 16 歳の甥のデニス (Dennis Clement) が牧師館に住んでいる。クレメント牧師がデニスの将来を案じ、大学に行かせてやる資金がないことを申し訳なく思っている

ことから、クレメント牧師が保護者としてデニスを育てているようで、デニスの両親は亡くなっているのだろう。『牧師館の殺人』以降、デニスは登場しない。『鏡は横にひび割れて』ではクレメント牧師に代わって次の牧師が登場するが名前は明記されていない。

3. 3. 4.　医者

セント・メアリ・ミード村の医師（開業医）として最初に登場するのは短編集『13 の謎』に登場する「ここ 5 年間、セント・メアリ・ミード村の様々な病気を治してきた年配の独身の医者」（120 頁）ロイド医師（Dr. Lloyd）であるが、『牧師館の殺人』で村の医者はロイド医師から、警察医も担当しているヘイドック医師に交代する。ヘイドック医師に家庭がある描写はないが[12]、短編集『ミス・マープルの最後の事件簿』に収められている「管理人事件」（“The Case of the Caretaker”、1942 年）に姪のクラリス（Clarice Vane）が登場する。『牧師館の殺人』から約 30 年後の設定となる『鏡は横にひび割れて』では、ヘイドック医師も年を取り、半ば引退しており、妻帯者のサンドフォード医師（Dr. Sandford）がヘイドック医師とともに村の医療を担っている。

3. 3. 5.　弁護士

短編集『13 の謎』の前半の 6 編の短編と「ミス・マープルの思い出話」にミス・マープルの最初の事務弁護士（solicitor）としてペサリック氏（Mr. Petherick）が登場する。ペサリック氏の事務所の開業場所は明記されていないが、「ミス・マープルの思い出話」でセント・メアリ・ミード村から「20 マイルほど離れた町であるバーンチェスター（Barnchester）」（99 頁）で起こった殺人事件の弁護も担当していることから、ペサリック氏の事務所はセント・メアリ・ミード村ではなく、州の警察本部もあるマッチ・ベナム町にあると思われる。ペサリック氏は「ミス・マープルの思い出話」の語りの現在の 2 年前に他界し、現在は彼の息子（Mr. Petherick Jr.）が父

親のあとを引き継ぎ、ミス・マープルの事務弁護士となっている。なお、『パディントン発4時50分』で披露されるミス・マープルの例え話の中には、セント・メアリ・ミード村の弁護士としてウェルズ氏（Mr. Wells）とその息子（Ronnie Wells）の話が登場する。

3. 3. 6.　バントリー大佐夫妻

ミス・マープル作品全体を通じて、ミス・マープルと長く交友関係を保っているのがゴシントン・ホールに住むバントリー大佐夫妻である。彼らの交流は1930年代が舞台の短編集『13の謎』から始まる。ゴシントン・ホールは厳密にはセント・メアリ・ミード村の「近く」（「青いゼラニウム」100頁、「溺死」225頁）にあるのであって、村の中にあるのではなく、『書斎の死体』によると、セント・メアリ・ミード村から1.25マイルから1.5マイルほど離れたところにあるカントリーハウスである。『書斎の死体』によると、バントリー大佐はケンブリッジ大学出身の退役軍人で、『鏡は横にひび割れて』によると、引退後にゴシントン・ホールを購入し、当地に引っ越して来たことになっている。作品には一度も登場しないが、『鏡は横にひび割れて』で夫妻には4人の子どもと9人の孫がいることが明らかになる。1960年代が舞台の『鏡は横にひび割れて』では、バントリー大佐は作品の語りの現在から数年前に亡くなっており、バントリー夫人は敷地内のイースト・ロッジ（the East Lodge、「ロッジ」とは大邸宅の門番小屋）に移り住み、ゴシントン・ホールとその地所の大部分を売ってしまう。『鏡は横にひび割れて』以降、彼女は登場しなくなるが、その後もミス・マープルとの付き合いは続いたに違いない。

結び――他作品との重なり

論文「(1) 年齢」で分析したように、時代背景は確実に変化しているのに、ミス・マープル自身は（特に後期作品において）時の流れに逆行し、若返っているようにも見え、ミス・マープルという人物の虚構性を感じざる

を得ない。しかし、ミス・マープルの作品群に登場する人物がクリスティの他の作品にも登場し、彼らの変化を描くことで、ミス・マープルも移り行く時代に生きていることが分かるようになっている。そこで最後に、クリスティ作品を横断する登場人物たちについてまとめておこう。

『パーカー・パイン登場』（*Parker Pyne Investigates*、1934 年）に初登場し、ポワロ（Hercule Poirot）作品の常連となるオリバー夫人（Ariadne Oliver）は『蒼ざめた馬』（*The Pale Horse*、1961 年）で、知り合いのマーク・イースターブルック（Mark Easterbrook）の従姉ローダ・デスパード（Rhoda Despard）夫妻[13] の自宅を訪問した際、マッチ・ディーピング村（Much Deeping）のカルスロップ牧師夫妻（Caleb Dane Calthrop and Maud Calthrop）と知り合う。この牧師夫婦はリムストック村（Lymstock）を舞台にした『動く指』で描かれているように、ミス・マープルの友人でもある。

また、経済界裏社会の大物であるロビンソン氏（Mr. Robinson）がポワロ作品の『鳩のなかの猫』（*Cat Among the Pigeons*、1959 年）とミス・マープル作品の『バートラム・ホテルにて』の双方に登場する。さらに彼は『フランクフルトへの乗客』（*Passenger to Frankfurt*、1970 年）やトミーとタペンス（Tommy and Tuppence）作品の『運命の裏木戸』（*Postern of Fate*、1973 年）にも登場する。こうしたことから、ミス・マープル、ポワロ、そしてパーカー・パイン（Parker Pyne）、トマス・ベレスフォード（Thomas Beresford）とプルーデンス・カウリー（Prudence Cowley）たちは同じ時代のイギリスを生きていることになっていることが分かる。

また、登場人物だけでなく、舞台となる場所にも重なりがある。セント・メアリ・ミード村近くの町マーケット・ベイジング（Market Basing）はポワロ作品の「マーケット・ベイジングの怪事件」（“The Market Basing Mystery”、1923 年）と『もの言えぬ証人』（*Dumb Witness*、1937 年）や、トミーとタペンス作品の『親指のうずき』（*By the Pricking of My Thumbs*、1968 年）では事件の起こった場所となり、クリスティの初期作品『チムニーズ館の秘密』（*The Secret of Chimneys*、1925 年）や『七つの時計』（*The*

Seven Dials Mystery、1929 年）でも言及され、クリスティ小説の登場人物たちは同じ空間も共有していることが分かる。

もちろん、ミス・マープル、ポワロ、トミーとタペンスの周囲に同じ脇役を登場させることで不都合も生じている。舞台背景となっている時代は確実に変化しているのに、ミス・マープル同様、登場人物が年を取らないという矛盾が生じている場合もあるからだ。しかし、特にトミーとタペンスは、1920 年が舞台設定の『秘密機関』（*The Secret Adversary*、1922 年）に初めて登場した際は戦後の失業問題に悩む若者で、1940 年が舞台設定の『ＮかＭか』（*N or M?*、1941 年）では 40 代になり、軍や政府機関で働いている双子の子どもも登場し、最後に登場する『運命の裏木戸』では 70 代になり、孫たちに囲まれているので、クリスティの想像の世界の中では、ミス・マープルを含む、彼女の産み出した探偵たちは皆、彼女とともにイギリス社会を生き、彼女とともに年を取っているに違いない。

以上、前回の論文「(1) 年齢」と本論文「(2) 人物相関図」では、アガサ・クリスティの創作したミス・マープルを、まるで実在の人物であったかのように扱い、ミス・マープル作品を「透明な批評」で読み解いてみた。「透明な批評」の存在を指摘し、それに批判的であったナトールの意見に従えば、どちらの論文もテクストから逸脱した行為による読解と見なされるかもしれないが、推測ではあっても、作品の時代背景や登場人物の過去を理解することで、クリスティのミステリー小説を読む愉しみが増すのではないか、そしてあわよくば、文学作品としてのクリスティ小説の分析が深まるのではないかと期待している。今後、ミス・マープル作品に描かれた田園のイングリッシュネスの変遷について、そして、20 世紀のイギリスにおけるオールドミスの表象についての研究を行う予定でおり、これからもミス・マープルとの（想像上の）交流を深めていくことを楽しみにしている。

注

1　後期作品の『鏡は横にひび割れて』（*The Mirror Crack'd from Side to Side*、1962年）でも、ミス・マープル自らが「私は人生のすべてを、ある小さな村で暮らして過ごしました」（28頁）と言っている。

2　ミス・マープル自身はウエスト夫妻に向かって、バートラム・ホテルに滞在したのは「一度」（15頁）だと述べているが、バートラム・ホテルの受付係ミス・ゴーリンジ（Miss Gorringe）は、「彼女〔ミス・マープル〕は子どものころ、よくここに泊ったとおっしゃっています」（127頁）と述べているので、ミス・マープルは幼いころよくロンドンに滞在しており、ここからも「辺鄙な田舎で一生を過ごした」わけではないことがうかがえる。

3　やはり牧師の娘である、トミーとタペンス（Tommy and Tuppence）作品のプルーデンス・カウリー（Prudence Cowley）も、短編「牧師の娘」（"The Clergyman's Daughter"、1923年、現在は短編集『おしどり探偵』（*Partners in Crime*、1929年）に収められている）でスーツケースに聖書を入れて持ち歩いている。

4　ちなみに父親もパリに出かけることがあったようで、『パディントン発4時50分』（*4.50 from Paddington*、1957年）でミス・マープルは、父親がパリ万国博覧会のお土産にブロンズ製品を買ってきてくれた思い出話をしている。

5　スーザン・ケント（Susan Kinsley Kent）によると、第一次世界大戦時、女のあるべき姿は古き良き時代の理想に逆戻りし、家庭を守り、戦場に赴く男たちのために編み物をするという型ができあがったという（14〜15頁）。常に編み物をしている印象を与えるミス・マープルだが、親族に宗教関係者と同時に軍人が多かった彼女は、第一次世界大戦中に、親族や地域の人びとのために編み物をし、その習慣が続いているのかもしれない。

6　レイモンドは結婚後はセント・メアリ・ミード村を訪ねるよりもむしろ、よく自宅におばを招待している。『スリーピング・マーダー』（*Sleeping Murder*、1976年）ではミス・マープルの誕生日を祝うためにロンドンに彼女を招き、短編集『ミス・マープルの最後の事件簿』に収められている「グリーンショウ氏の阿房宮」（"Greenshaw's Folly"、1956年）では田舎の別宅に彼女を招く。『鏡は横にひび割れて』でミス・マープルは、レイモンドの自宅で開かれた会食に参加した際に若者たちの振る舞いに驚かされた経験をヘイドック医師（Dr. Haydock）に語り、『復讐の女神』ではレイモンドに招待してもらって観劇した『マクベス』のことを思い出している。

7　おそらくジョイスとジョアンは同一人物で、クリスティが名前を間違えたか、途中で敢えて名前を変えたかのどちらかだと言われている。

8　『バートラム・ホテルにて』にはスポーツ・カーやレーシング・カーのような車の愛好家である「ある姪孫」（114頁）についての言及があるが、これもイギリス国鉄に就職したデイヴィッドのことかもしれない。

9　後期の『バートラム・ホテルにて』では、バートラム・ホテルの宿泊者名簿でのミス・マープルの欄は「ミス・ジェイン・マープル、セント・メアリ・ミード、マッチ・ベナム」（148頁）となっているので、セント・メアリ・ミード村はマッチ・

ベナム町の一部となったようである。

10　例えば、スー・ブルーリー（Sue Bruley）を参照されたい（19, 62 ～ 63 頁）。

11　ただし、『牧師館の殺人』の会話では、「プランC」と異なり、ミス・ハートネルはヘイドック医師の隣に住んでいることになっている。

12　ヘイドック医師に家庭があれば、村のゴシップ好きの面々の噂話に出てくるだろうから、おそらく独身なのだろう。彼は『鏡は横にひび割れて』でミス・マープルに「ひとり酒はいけない」（30 頁）と忠告されている。セント・メアリ・ミード村のオールドミスのトリオに倣って、好き勝手な邪推をすれば、『牧師館の殺人』に登場するレストレインジ夫人に、『牧師館の殺人』の語りの現在よりも 20 年ほど前に他の土地で開業医をしている際に叶わぬ恋心を抱き、その後も独身を通したとも考えられる。

13　旧姓はドーズ（Dawes）で、夫デスパード氏とともに、ポワロ作品の『ひらいたトランプ』（*Cards on the Table*、1936 年）に先に登場している。デスパード氏は『ひらいたトランプ』ではジョン（John）という名前で、少佐（Major）であったが、『蒼ざめた馬』ではヒュー（Hugh）という名前で、大佐（Colonel）に昇格している。

引用文献

Bruley, Sue. *Women in Britain since 1900*. London: Palgrave, 1999.
Christie, Agatha. *At Bertram's Hotel.* 1965. London: HarperCollins, 2016.
——. *An Autobiography.* 1977. New York: HarperCollins, 2011.
——. *The Body in the Library.* 1942. London: HarperCollins, 2016.
——. *By the Pricking of My Thumbs.* 1968. HarperCollins, 2015.
——. *Cards on the Table.* 1936. London: HarperCollins, 2016.
——. *A Caribbean Mystery.* 1964. London: HarperCollins, 2016.
——. *Cat Among the Pigeons.* 1959. London: HarperCollins, 2014.
——. "The Clergyman's Daughter." *Detectives and Young Adventurers: The Complete Short Stories.* London: HarperCollins, 2008. 137–49.
——. *Dumb Witness.*1937. London: HarperCollins, 2015.
——. *4.50 from Paddington.* 1957. London: HarperCollins, 2016.
——. "The Market Basing Mystery." *Hercule Poirot: The Complete Short Stories.* 1999. London: HarperCollins, 2008. 184–91.
——. *The Mirror Crack'd from Side to Side.* 1962. London: HarperCollins, 2016.
——. *Miss Marple's Final Cases.* 1979. London: HarperCollins, 2016.
——. *The Moving Finger.* 1943. London: HarperCollins, 2016.
——. *The Murder at the Vicarage.* 1930. London: HarperCollins, 2016.
——. *A Murder Is Announced.* 1950. London: HarperCollins, 2016.
——. *N or M?* 1941. London: HarperCollins, 2015.
——. *Nemesis.* 1971. London: HarperCollins, 2016.
——. *The Pale Horse.* 1961. London: HarperCollins, 2017.

——. *Parker Pyne Investigates.* 1934. London: HarperCollins, 2017.
——. *Passenger to Frankfurt.* 1970. London: HarperCollins, 2017.
——. *A Pocket Full of Rye.* 1953. London: HarperCollins, 2016.
——. *Postern of Fate.* 1973. London: HarperCollins, 2015.
——. *The Secret Adversary.* 1922. London: HarperCollins, 2015.
——. *The Secret of Chimneys.* 1925. London: HarperCollins, 2017.
——. *The Seven Dials Mystery.* 1929. London: HarperCollins, 2017.
——. *Sleeping Murder.* 1976. London: HarperCollins, 2016.
——. *They Do It with Mirrors.* 1952. London: HarperCollins, 2016.
——. *The Thirteen Problems.* 1932. London: HarperCollins, 2016.
廣野由美子『批評理論入門——『フランケンシュタイン』解剖講義』（中央公論新社、2005 年）
Kent, Susan Kingsley. *Making Peace: The Reconstruction of Gender in Interwar Britain.* 1993. Princeton: Princeton UP, 2019.
Nuttall, Anthony David. *A New Mimesis: Shakespeare and the Representation of Reality.* London: Methuen, 1983.
坂田薫子「「透明な批評」で読むアガサ・クリスティ——ミス・マープルの履歴書（1）年齢」（『英米文学研究』57 号、2022 年、21 ～ 52 頁）